

まじめなモノづくり精神、今に 瀧上工業創業120周年

高い技術力で確かな信頼築く



瀧上品義社長 インタビュー

Sグレードの大手橋梁ファブである瀧上工業は、2015年度で創業120周年を迎えた。戦後日本のインフラ整備を高い技術力で支え、確かな信頼を築いてきた。足元では橋梁、鉄骨ともに業況が改善しているが、中長期的には困難な課題も多い。この中で大きな節目を迎えさらなる発展を目指す、瀧上品義社長に、今後の展望などを聞いた。

——大きな節目を迎えた感想から。
「名古屋市内での個人創業から120年間、まじめなモノづくりの精神が関係者に支えられ、ここまでくるのができた。先達、取引先、株主、

従業員に感謝申し上げた。ただし、これからは先行き不透明で世の中の動きが激しい中、このようにしてこの会社を社会の一員として、重要な立場に置き続けられるかに大きな責任を感じる。昨年、関連会社6社を完全子会社化し、瀧上グループ全体でベクトルを合わせ、人材を有効活用することできたらいい。その一つの象徴としての120年でもある」

半田 名実とも日本一に 本社工場

——「中部電力を中心とした電力系鉄骨に携わったことで技術力の革新が起き、それが戦後のインフラ整備の波に乗り橋梁進出につながった。今後は、新設橋梁だけでなく保全事業にも注力する。昨年に保全グループを保全本部に格上げし、本年度から本格的に活動を進めていく」

——長期にわたる事業継続の秘訣は何か。
「まじめなモノづくりに取り組み続けてきたことと、それによる顧客からの信頼を獲得できたこと、さらに強固な財務体質も大きな要素だ。国内トップクラスの広い敷地を持つ半田本社工場を、名実とも日本一の工場にすることが今後の目標だ」

——受注価格の面で「いわゆる、担い手三法」が昨年5月に成立したことが、業界にとって大きな福音。今後、その理念が単価に反映されるよう働き掛けていくのが、業界の重要な使命と感じる。一方、工場コストが7割を占めることも、業界が発注者に伝えるべき課題だ。また橋の工事、湯水期施工などの制約が多く、短工期の要求も強いが、品質、安全への影響に加え、工場製作の山積み平準化にとっても、少し余裕のある工期の設定を望む」

——新規事業への取り組みも強化する。
「一昨年度に新規事業開発室を開設した。橋梁事業のみへの依存から、別分野の事業を将来に向けて育てていく。既に不動産や太陽光発電を手掛けているが、少しでも事業の幅を広げていきたい」

——新中期経営計画もスタートした。
「新中期計画は瀧上グループとして成長を遂げるべく、3カ年の最終年度の売り上げ目標がグループ連結で175億円、営業利益率で2・5%、ともに前中期計画の目標から引き上げた形だ。橋梁事業は前3カ年の堅調維持を目指し、鉄骨・鉄構事業の再整備を盛り込んだ。また人材の採用育成にも注力していく。これなくしてはどんな事業も継続できない」

——今後の事業継続、発展に向けて。
「新中計に掲げた既存事業のさらなる強化と保全、新規、海外の各事業を推進していく。海外では昨年10月、フィリピン・マニラに駐在員事務所を開設し、現地の情報収集を進めている。ベトナム工場は6年目に入って単年度黒字となり、本格的な橋梁の第1号となる南北鉄道橋梁のトラス橋製作も実現した。当面、これ以上の海外拠点は考えていないが、これらの事業を一つの転換点にした」

——そのための具体的なプランは。
「直近4年間で約10億円を投じ、橋梁部門の設備投資を積極的に進めた。今後は鉄骨・鉄構事業でも、設備などの体制を再構築する必要があり、グループ会社と一体で検討していく。東京オリンピックに伴う需要と、その後の状況なども勘案しながら整備を進めたい」

——足元の状況認識を。
「鋼橋発注量は前年対比で10%以上の減少を予想する。全体予算は下げ止まっているので、新設橋梁が減り保全が増える方向と認識しており、保全に力を入れざるを得ない」

——「一人一人が意思を持ってレベルアップしていく。この難局は乗り越えない。そのため会社に社として動機付けのためのメッセージを発していく。120周年は一つの節目でもある。社員には24時間与えられている。その時間の中でいかに真剣に深く考えるかにかかっている」と言っており、自分の仕事ごとでどのように会社に役立っているかを認識するだけでも、モチベーションが上がる。社員はまじめで優秀だと確信している。秀たたと確信している。で、動機付けの材料を与えればもっと伸びると思う。経営陣が努力することで社員を伸ばし、さらなる企業継続、発展につなげていく」

（安江 芳紀）